



新井鉄工所本社ビル

明治36年創業。昭和12年、現・アライプロバンスの本社が建つ場所に、鉄筋コンクリート造の本社ビルを竣工。ビルの前に並ぶ従業員たち。右ページ写真の背景と同じ建物

アライプロバンス

2016年、新井鉄工所は鉄工所事業を撤退。2020年、社名を株式会社アライプロバンスと変更し、物流倉庫開発、賃貸マンションやオフィスビル開発の運用、不動産コンサルティングなど、総合不動産会社として新たなスタートを切った(2点とも提供・アライプロバンス)
 ■墨田区江東橋2-8-3/TEL03-3633-6931



新井鉄工所は明治三十六年に静岡県出身の新井久次郎によって墨田区の江東橋(現在のアライプロバンス本社所在地。錦糸町駅近く)に設立された。久次郎の父は伊豆華山に反射炉を作り砲身を鑄造し、また台場を築造したことで知られる幕末の砲術家、江川太郎左衛門に師事した。

さつきさんは九十歳を超えているが、お元気で記憶もしっかりされている。これまで知られていなかった相磯凌霜についていくつか貴重な話を聞くことができた。

七月、この相磯凌霜をよく知る人に会って話を聞く機会を得た。本誌編集者のTさんが、たまたま水辺の取材で総合不動産会社アライプロバンスの代表取締役専務、新井太郎氏に会ったところ、その会社が実は新井鉄工所のおとを継いでいるとわかり、そこから相磯凌霜のことをよく憶えているという新井太郎氏の伯母にあたる新井さつきさんを紹介してもらった。

しい本を見つけたので、それを荷風に見せ、貸したのだろう。

以降、「相磯」の名はしばしば『断腸亭日乗』に登場する。二人の親交が深まっていることがうかがえる。

昭和二十年の三月十日に東京大空襲によって、荷風の自宅、麻布市兵衛町の偏奇館が焼失したあと、相磯は荷風の身を案じて翌十一日に偏奇館の焼跡を訪れる。そこでたまたま身を寄せていた代々木の従弟、杵屋五郎の家から焼跡の様子を見に来ていた荷風は相磯に会う。自分のことを心配してわざわざ大田区の久ヶ原から偏奇館まで見舞いに来た相磯の厚情に、荷風は

喜んだことだろう。

戦後、市川に移り住んでからは、荷風はなかなか住居に恵れなかったため、相磯が京成電車の海神駅(船橋市)近くににあった相磯の別荘をしばしば借りて、そこで仕事をしている。

友人というものの少なかった荷風にとって相磯は、頼りになる数少ない友人だった(年齢は相磯のほうが十四歳年下)。

昭和三十年には、相磯が荷風に話を聞いた『荷風思出草』(毎日新聞社)を出しているし、昭和三十三年に東都書房から『永井荷風日記』(「断腸亭日乗」のこと)

が出版されたとき、相磯はそれに詳細な注釈をつけている。荷風文学の良き理解者だった。

昭和三十四年四月に荷風が亡くなったとき、市川市八幡の自宅で行なわれた葬儀を裏方として取り仕切ったのは相磯だった。

知れば知るほど荷風にとって相磯凌霜が貴重な存在だったことがうかがえる。

※